古今和歌集 下巻一冊
四半本 辰五

頓阿門弟兼好法師集ニ入
古今集下巻一冊

ふれの
兼好法師筆

古今和歌集

544
コ
99

544
コ
99

九州大學圖書

九州大學圖書
昭和 24. 3. 19
182193

古今和歌集巻第十一

恋哥一

題しらす　読人しらす

ほとゝきすなくや五月のあやめくさ
あやめもしらぬこひもするかな

素性法師

をとにのみ菊の白露よるはおきて
ひるは思ひにあへすけぬへし

紀貫之

よしの河いはなみたかくゆく水の
はやくそ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白浪のあとなきかたにゆく舟も
かせそたよりのしるへなりける

在原元方

をとは山をとにきゝつゝ相坂の
関のこなたに年をふるかな

くもんとおきつしるさと
作物長
世中そかくしくわりくかくとの
みあみあくてえしよりなと
女道乃むまんの日暮ちのひもひさ
てたりなくくさみえてすてらる若
りおれほのつかみてあまはししてつ剣
妻成ちひの野
又すとめくみすとゆくのをしく

わやすくふやすくさくしさん
秋し　みんちつて
ましなしおすまわやあくつきれやう之
そののこしくとまくまりたれし
かすのそりき由りわまろけよとのみ
いてあすなくる女みしふ家をたのそつ
まろく　みのこみ孫
かすらみく高まれひそおしいてる
草まめつるみくしきみのと

ことのかはみしかきよはあまりてさて
ならけなくのこりのころもみえつる
なか　つゆき
ところ露ゆきまやはのかりと
みえしくしや之しわか
題しらす　こと
たかうもわかおもひのゆくへまさん
もとくてはくるそらけれ
[illegible]

けふのうつは鮮きしきを
かの見よのと地ともりよる
はゆき
あふはゝうあかなたかなみの
はまこさくはる也るかれ
しみくしす
かいことそこえさうなみらけて
あすみとむのねふきひ
ゆふくれそくものうへてわうし

あまつそらなる人をこふとて
かりこものおもひみたれて我こふと
いもしるらめや人しつけすは
つれもなき人をやねたくしらつゆの
おくとはなけきぬとはしのはむ
ちはやふるかものやしろのゆふたすき
ひと日も君をかけぬ日はなし
我恋はむなしきそらにみちぬらし
思ひやれともゆく方もなし

するかなるたこのうらなみたゝぬひは
あれとも君をこひぬ日そなき
ゆふつくよさすやをかへのまつの葉の
いつともわかぬ恋もするかな
あしひきの山した水のこかくれて
たきつ心をせきそかねつる
吉野川いはきりとほしゆく水の
おとにはたてし恋はしぬとも
たきつせのなかにもよとはありてふを なと

みよしのゝやまよりゆきのきえ
しらみそめくるのよそめに
かくらくもいつかはて
とかはらさるのはなにくはし
いかにしらわきしきりのをと
人しれすこそつもるたちはな
すゝしかるのみかはいろの来
あきのゝおもかけやさくらの
こゝやこひしかりとむすと

やよひ梅のはつかうくひすの
ねかきうかへきさえみかなる
わいきのとふますやうしや
たまにはしはれそはなは
夏そはしはやうすゝやうの
いつまてにかれきてあせむ
こそしくゝてのもてみるさ
なつけれきかへつゝも
あふくゝうてゝるゝはふ

恋のみされ此はなはかなさむ
みちのはしのふかくしれけるか
なかはしもしとめてと
わか恋を人しれやしれさくの
枕のみしるはしらさん
わきのまのみれしのしるをも
人しれすやふくすかい
いしいとりやすらぬれの
まちゐとわかれのあさ

おもふともわれこそのあや
ゆふてふくろはれは
いつまとく人なきこふ夜はの
ゆふさのうそかい物思ふつれ
保護のあまつまのわきの一かるむ
いけるやてとよりつつ
いそおもこのわきのつりかからつつく
くろしのけやこふかれしめ
涙のかるまみなれとそうきゐむ

ものゝふのなかにそかくれける
なかしわかいへのと松かえたら
いまといゝわかきやうて
わさなく文武の道のこと
こゝろさしのあつき世をうけつき
やすらひけまはしけるの
ちからをくらくわかおくをあまねく
唐むりとゆかりかたきは
ぬらすらんかゝる義

和あてか桃さえしかるゝし
いかなしよる夢みくもし
いしきさ為とふかきのふは
あふれはやさくわくらる
くのすをなうへのをわそて
つきんくひをやしめつし
あめならくしきさゆえくけす
そらつもしかおくらし
こしくとのやうそん月のまへて

はるかきへくとおもひやらん
ありかもへくとりそこにとの
うつりにそなけきつゝる
ゆくあかすくらとつまきに
みすのくとこうけや
いはえくそ物おわねや
まれまふさしきりくん
思やなきいつよならやさる
こよゆちらくわらくのあさ

木のしらよわりむひとよおもへ
くちをしゐ物こそりの
忘れ物もちやさむらうとその
いるそすかゆめよみたみ
たそさは梅花ふうさいれよい
ゆめもさりよくそすわろる
うらすまはわかけもらう
はれてくよそらふとのゆく
おつらひよめはむきみかれそうらく

源の川よりさてしゆゝん
海火乃のうとかう者のやりさは
まうふてまてしとゆゝうらうそれ
けやきをふみかおゝを女乃袖の
すそさの川よふやし地を
おきへつうとりて山との浪のそて
みえらてのつゝや忘れつら苗
わりをのけくへ江乃白浪の
きすやくとくしんてき

人しはとつねはまりなら
わつらく我すそりえし
ならふ鳥の鮮ときこえおくとの
わきさんとくはきするん
相坂乃ゆふつけとりとやゆく
んらや逢ふさ秋のえうとし
あふさゝの関よあうくいそしあ
いくへいつよりひしい す後
しは常れくつるしそ修劉名也

ちきんとしつく〳〵のかへ
おもひくらしとよむはたの
うくつねにそわりしも見え
人くものつもりかさいん
くるしきものゝ事をし
らくすしてふかれくるをの
おもしろくいきすひろく
春そはさゆる氷のとつく
煮つこころそ哉よとけるむ

あけぼのそでみのおもろへおきくとし
もろいはちみりしわすれ
夏を見えとくるもすると
こゝろゆひらそめりそり
りうきはいきいひさ哉わ
松のうゆき花きうけ
こはうそと恋しすはおわをと
松の中へわやしうそう
わきのこそほとゝくとふきあ

あさからはうきよのはしをきえん
秋乃田のかりほをてらすつきの
ひかりのまにも秋やうつすらん
ひとよりかなしふかる花すゝき
みこゝろにそふかうらみしすゝめとあらん
かはる雲のあまりにぞたえよかけつ
秋との月ひのしらきはかる
おくらぬすゝきのいろもちかきの
ふかきいろとものしけきかな

古今和歌集巻第十二

恋歌二

題しらす　小野小町

思ひつゝぬれはや人のみえつらんゆめとしりせはさめさらましを

うたゝねにこひしき人をみてしよりゆめてふ物はたのみそめてき

いとせめてこひしき時はむはたまのよるの衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝよことに

しもついつもてらに人のわさしける日しんせいほうしのたうしにていへりけることはを歌によみて小野小町かもとにつかはせりける

あへのきよゆきの朝臣

つゝめとも袖にたまらぬしらたまは人をみぬめのなみたなりけり

返し　　小町

おろかなる涙そ袖に玉はなす
我はせきあへすたきつせなれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
藤原敏行朝臣

恋ひわひてうちぬるなかにゆきかよふ
夢のたゝちはうつゝならなん

すみの江のきしによるなみよるさへや
ゆめのかよひちひとめよくらん

をのゝよしき

我恋はみ山かくれの草なれや
しけさまされとしる人のなき

紀とものり

宵のまもはかなくみゆるなつむしに
まとひまされる恋もするかな

ゆふされは蛍よりけにもゆれとも
光みねはや人のつれなき

さゝの葉におく霜よりも独ぬる

我ころもてそさえまさりける
わかやとの菊のかきねにをくしもの
きえかへりてそこひしかりける
河のせになひくたまものみかくれて
人にしられぬこひもするかな
たゝみね
かきくらしふる白雪のしたきえに
きえて物思ふころにもあるかな
藤原興風

君こふる涙のとこにみちぬれは
みをつくしとそ我はなりける
しぬるいのちいきもやするとこゝろみに
玉のをはかりあはむといはなむ
わひぬれはしゐてわすれむと思へとも
ゆめといふものそ人たのめなる
よみ人しらす
わりなくもねてもさめてもこひしきか
心をいつちやらはわすれん

あしきにつくくもはしきりに
しらしきゝのおもやなきん
赤乃つゆま
あさる鷹なみてしまく唐衣
ひめのあらいそもかぬ
たいしらす
世ことふかくれそゆく源氏
みそこけるに人まうけたり
ゆふ化すと露やなくん移すゝ

かつら神のいろそめつゝね
素性法師
はるかくてゆきわと人をみつるは
路の花くちきつらしみる
藤原つさ
いつくらのそてこりせはつこゝそ
このひと神に志はそゝきま
大江千里
移りかきてしらしつゝも菅家

ゆるし神こゝろをこらへん　打しゆふの袖
我しく物やおもふとゝはさりけるを
ときうしろくらしまゝくらん　作者兼盛
さ月山木すゑをたかみ時鳥
鳴音空にきこえわたるなり　凡河内躬恒
杜鵑氏やうつりけり時わかぬきさらきのまゝん
しらなみのまそをおもひかへすくよ　清原ふかやふ
雲乃上に群るちとりはいつれともしらぬ
海のおもしろき青きかつらに
こほれよみ人乃まちのころきのさ
みよ人しらす
わきまへつゝもしらすて　鳴鹿
我おもしやひとわかれ秋の月
もとみてまて　作者兼

秋のゝにみたれてさける花のいろの
ちくさにものをおもふころかな
つらゆき
ひとりして物をおもへは秋の田の
いなはのそよといふ人のなき
みつね
人を思ふ心はかりにあらねとも
くもゐにのみもなきわたるかな
ふかやふ

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく
人のこひしかるらん
たゝみね
まこもかるよとのさは水あめふれは
つねよりことにまさるわかこひ
つらゆき
やまとにはへりける人につかはしける
こえぬまはよしのゝ山のさくら花
人つてにのみきゝわたるかな
やよひはかりにものゝたうひける人の

まこと人めかしてこすまきていかれ
侍らしなる
あかつきの花になきとめて
風わくしきをのえれけく
もしらす　悦こひの里
我恋よくらふの山にさくらなか
ゆめくらうをかすはましし
むら野にさきける
あきの野に君を待ちて我恋や

恋すみして恋しくらら葉　そくみえ
たきつせにおちてしなかさまの
うきくさの恋て我しなかぬ　心そ物うき
我恋のくらふわきて出るかな衣
かけて見わけのやまもるし
あつまちのはやのなかさくる
まれの人とさきてめるらん

きこえし枕のきりは海はおもえて
くもとなりはおつすくわりなく
にほの色そきよ思ひはわりなき
らみたりしいはれこゆるも
わか恋はしるしあらはれてよくよ
まことに我ぞしらそ
しらせしみしるみてこそ卒
うちそへゆくへしられ
みなは

夏の夜とてもいひもしらぬ
秋ともいひぐりぬつるまで
たのみぬ
風のおとは宮のやまき雪の
さそひていつかさ恋のこころ
月の計は秋にとふことのそらは
ありかよくてわれしやみん
あやぬ
しらかつたのかねいとし世中に

つかさめしにひつまへと
つゆまく
はの国にすみわたるなる
よけき稚之人しもこそや
あとおりくけいつゝよしみゆと
にきあつらいつかれねは
はしりなきのみちゆゑなし
かなけさとはのみゆるし
らとのまさ

事よりいてゝおほえけるそは
よきことしくてさめよと
なと孫
君か代の千世を松とはゆはやれは
祝ふこそ千代をたのめけれ
おもしろきはかりてよしくありけるもの
見えつゝなみをのこしたるなり
けふみえにけり 兼

拝らいろはしまゝ之銭こよ
わらこうまさし衆のこ給ハ
今なく
銭ひそりをとかはてよ
おふとかきらとふらそ
皃のみかすらうしはをと
わそまくとかにしいうかれ
おやな
里へや衆しなまつとかいそ

いおもし候気ちたろ
又つ稀
なみたわそろしめいつちく
こらゐんをんいさするん
御ものまゝ
いろやいうまゝ候いふゆめわまとぬ
おふまゝしつはゆしつまく

古今和歌集巻第十三

恋哥三

やよひのついたちよりしのひに人に物
いひてのちに雨のそほふりけるによみて
つかはしける

おきもせすねもせて夜をあかしては　在原業平朝臣
春のものとてなかめくらしつ

なりひらの朝臣の家に侍りける女のもとによみて
つかはしける　としゆきの朝臣

はまへのまつはふかは海に
神のみやゐをかけてもるか
かつ比せよらるそ松にふかみとれ
たかさこの翁
わきかへる神はつねさへみてこゝに
すはくたえしきさのよん
たいしるて　みへてきす
しらくすこもゝしとひくつれて
へらきなる二郎　きりつき

いつふゆきてきみそのゆくよ
みまくうしさよ　つきすもへて
わかれ衣のあかりつもるかな
残りへもふるわつきよめと
こゝなは神くのつく橘
なるとの姥
林乃野小さやけしわさの神ちを
あそこし衣乃いわまさる
小野小町

みちのかいのき我かとしもへぬるや
かはそわかれあしらくる
源宗于朝臣
わちすてゝひうかゝまきのにれ
まくやくとつしぬと之
みふのたゝみね
有明のつれなくみえし別より
あかつきはかりうきものはなし
わかのりまさ
おもひのもとめしゝ涙草なる
くみてのこゝろみえつゝくる
みんさて
かはくら風に雨さつそふなや
わきみのきさまてきさくるし
たゝみね
みちのくにわけいのつかきはるは
あきのをきひくるやうに
みちのわちのはけ

わやうてまうきさすなれのうてさは
わかやまんてみのかそくふ
こはこさ
人をつき殺ハすさみれにオこれん
昔と今うろ志つしをといつと
らみ人にちさ
ちつまちすさふみとるはなにこゑろ
人よくうわせしすゆは
はしうの年ひらよ人をたとへ

ふんさらかひとまろ志さのそらふかなけ
はかつらしとえつてかきのくちなかく
はかまをしひきすそをきぬはわかしきれ
おそかに代そらふ我にふ人北山をそよ
ら千枝につきろはことあけての人とつまて
みそやりふる　なりいの跡下
人しれぬ秋りしもひうの閑とうい
あゐくこふゝらとれするん
駒志つして　つゆま

しのふれとこひしきときはあしひきの
山より月のいてゝこそくれ　よみ人しらす
こひゝてまれにこよひそあふ坂の
ゆふつけ鳥はなかすもあらなん
をのゝ小町
秋の夜も名のみなりけりあふといへは
事そともなくあけぬるものを　凡河内躬恒
なかしとも思ひそはてぬ昔より
あふ人からの秋の夜なれは
よみ人しらす
しのゝめのほからほからとあけゆけは
をのかきぬきぬなるそかなしき
藤原国行
あけぬとて今はの心つくからに
なといひしらぬおもひそふらん
寛平御時きさいの宮の哥合のうた

かへるさの雁
ゆふかすみたつそらになかはさかりきて
あまと海にかへりつゝ
類しらす　寵　一説ウラ　一説チヨウ用之
きぬえのみちをしみおくる
なきかへるさかりにつきおくる
しみしみす
郭公ゆかりのかきつゆの
おきそのかけのつきの
山遠みたれはかならすよつと
我みくらしをくみえしと
為重
冬はさそやきとこそとをこそ
といつはときそて
くふかくさふかみたつ衛
まさの路
深わけ秋乃夢をはなるる
いやりみよし鶯

業平朝臣の伊勢国にまかりたりける
時斎宮なりける人にいとみそかにあ
ひて又のあしたに人やるすへなくておも
ひをりけるあひたに女のもとよりおこせた
りける　よみ人しらす
君やこし我やゆきけむおもほえす
夢かうつゝかねてかさめてか
返し　なりひらの朝臣
かきくらす心のやみにまとひにき
夢うつゝとは世人さためよ
題しらす　よみ人しらす
むはたまのやみのうつゝはさたかなる
夢にいくらもまさらさりけり
さよふけて天のとわたる月かけに
あかすも君をあひみつるかな
君か名も我名もたてし難波なる
みつともいふなあひきともいはし
なとり河せゝの埋木あらはれは

かうせうしよわしみきうけん
うのはなのさやくこと
たきのいとはたえてしてさふ
こひしくなきこえはせすく思せん
なかりのむかしてつるかゆか
れみてつるは
花てさほよいてひくるとしみ
たきゆふひとのむすめてまつ
たちつるあきくさのなきのくわのあれ

りるかのそらゆきになりなる
しみはたして
おもふらいこるく恋しかい
こよひまつくやうらはさきく
ぬし
たちるかなきさまく
なきこふる涙く神のちはやるは
ねきくへてまかしうはききそ
額たして こゆら
しなよらいもしのわきゆきくはらく

人めをもるとみるかわひしさ
かきりなき思ひのまゝによるもこん
夢ちをさへに人はとかめし
ゆめちにはあしもやすめすかよへとも
うつゝにひとめ見しことはあらす
よみ人しらす
思へとも人めつゝみのたかけれは
河とみなからえこそわたらね
たきつせのはやき心をなにしかも
人めつゝみのせきとゝむらん
寛平御時きさいの宮の哥合哥
紀とものり
紅乃色にはいてしかくれぬの
したにかよひてこひはしぬとも
題しらす　みつね
冬の池にすむにほとりのつれもなく
そこにかよふと人にしらすな
さゝの葉におくはつしもの夜をさむみ

しみはほくとなくにこそや
みんとす
らかるかれとみのられれいくこ
いめしくせいあらそ
このこめる人わかみれめわかれらんとす
きこのかやぬ
みほくいのかいのむれいろみ
ゆんあらみれをにきらむきて

平貞文

さつかくのさつをそくいれとあくと
流てゆきすむとくい
ゆとのを
下のこふなそくるしむかれの
そさうそくしくかにしれ
わかとしのいゑるかはよれ
らいられのなくいろゝ
みんとす
おほくはなれてみなこきいろ

しかもみつゝゝみなをすくもの
平貞文
秋ならはよみしつくりかきさゝるを
海をさわつてりつるな
しみくしみさ
風ふきはうゝ霜の松やや
新まわらくみさみつゝ也
みおこえるのうききのりのくらゝ也
池まさむみなれしともかあさみ

からくすれわかりよくなら
あふては山の花さかれさくらは
ちうのつらみのたきつをのこし
しるきのいろしはかいかきさくよ
春るしのりとえるしわるや
恋のはをやかいゝ新ま春かすこ
のらとしいらしらゝける
信明
まるゝいゝは桃らゝそ新しよも

ちりなんのちそ
さかまし

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらす　　讀人しらす

はるかすみたなひく山のさくら花うつろはんとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにをさくらに思ひまさまし

[illegible]

みしらぬにかりくらやいの
かちのつゆまよ
霜にいはみすますかの花
そうしそろくとゆらは之
浮風
松にまふ今はこそわする
我身けはいつすめまはく
らみ人まして
いゆゆく気乃しかとこそろ

かくしらみわりすともわらぬ
浮世はわのめきかゆすふらくるま
みるもくよおくらしとする
比ともの
春霞さるしくらのさくて花
みまこともわらんもわかれ
山やぬ
川をやヤりかまとのと思ふ
みつものうやしりくつき

凡河内みつね

かれはてん後をはしらて夏草の
ふかくも人のおもほゆる哉

あすか河ふちは瀬になる世なりとも
思ひそめてん人はわすれし

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

おもふてふことのはのみや秋をへて
色もかはらぬものにはありける

題しらす

さむしろに衣かたしきこよひもや
我をまつらん宇治の橋ひめ

又は宇治のたまひめ

君やこん我やゆかんのいさよひに
まきのいたとさゝすねにけり

そせい法し

今こんといひしはかりに長月の
有明の月をまちいてつるかな

よみ人しらす
月かゝし秋のしくてつけやらん
こゝろふかつまゝせをわれて
ことのはもやつていらしさき
我はしゆのまてしれくと
宮ゝまのつとあのゝきつゆとみ
風とさつしまとうちて
めかしいかとみえつらうの
つきけはさてうそれはに
はのくのすみやかすこしられ
かくゝすらひしばのゝしれ
つゆきり
志あれゝのやふはあつゝむ
こゝてつてわつしと哉
おかやぬ
恋つはくにたるつらしまもん
志あゝうこふふゝりけり
よみ人しらす

みよしのゝおほかはのへの藤波の
なみにおもはゝわかこひめやは
かくこひんものとはわれもおもひにき
心のうらそまさしかりける
あまの原ふみとゝろかしなる神も
おもふなかをはさくるものかは
梓弓ひきのゝつゝらすゑつゐに
わかおもふ人にことのしけけん
このうたはある人あめのみかとのあふみの
うねめにたまひけるとなん申す
夏ひきのてひきのいとをくりかへし
事しけくともたえんとおもふな
このうたはかへしによみてたてまつりけるとなん
里人のことはなつのゝしけくとも
かれゆく君にあはさらめやは
藤原敏行朝臣のなりひらの朝臣の家なりける
女をあひしりてふみつかはせりけることはに
いままうてくあめのふりけるをなんみわつらひ

侍るとききてかの女にかはり
てよめりける　在原業平朝臣
かすくにおもひおもはすとひかたみ
身をしる雨はふりそまされる
ある女のなりひらの朝臣をところさため
すありきすとおもひてよみてつかはしける
よみ人しらす
おほぬさのひくてあまたになりぬれは
おもへとえこそたのまさりけれ

返し　なりひらの朝臣
おほぬさとなにこそたてれなかれても
つゐによるせはありといふものを
題しらす　よみ人しらす
すまのあまのしほやく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり
玉かつらはふ木あまたになりぬれは
たえぬ心のうれしけもなし
たかさとによかれをしてか郭公

こゝにしもねたるこゑする
いてゝ人は事のみそよき月草の
うつし心は色ことにして
いつはりのなきよなりせはいかはかり
人のことのはうれしからまし
いつはりと思ものからいまさらに
たかまことをか我はたのまん
素性法師
あき風に山のこのはのうつろへは
人のこゝろもいかゝとそ思ふ
寛平御時きさいの宮の哥合のうた
とものり
蝉のこゑきけはかなしな夏衣
うすくや人のならんと思へは
題しらす　よみ人しらす
うつせみのよの人ことのしけゝれは
わすれぬものゝかれぬへらなり
あかてこそおもはんなかははなれなめ

きこえしゆらのつきはさしくもて
やすらんてねよふしのゆくふか
わかしわさからつきまつさき
ちなし我ともしるけまちまち
人のなかはわれひとせちな
たいそくわすのほれしもなれ
かたしやくのまらん
このまわたくのゆくまゝみのあかり
人かたみせ

ふかきよのしくれくもかゝめと
流てゆきしわかれをのせと　そをいはゝ
そこのかなやらゆくらはの
わきさきかりつきかれて　みへまとて
紅のなかなれみなみてくしらや
おもひしはの我ワすれ
かつてのこと

みちのくのしのふもちすりたれゆへに
みたれそめにし我ならなくに
と人々すけ
おもふやいかゝせしたら此風に
るゝくわきらのしのかたにうき
ちのかたふつろふせこゝえうすく
りしわきれりくちるゝみへ
此のこゝろ[illegible]
わかれもむきしのかくてめすくに

うらみとの人のうらみん
をうけのそむ[illegible]
くをわひのかたえなすけ我すらん
すくしへわかなとこゝみけす
[illegible]
そるゝきさえはくよれとうらむ
ふつろひにやりくすくり
みんとしと
ちつきくもとみひやとうりとも

秋きしゐみけやまとん
かへるふみそれはわか書なの
あるはまれ袖わかめ
ほかにゆくかるふる心
おるゝくやるいとかるん
さらみけあわれいふにふかな　信明
けふる袖やあはれにそへん
つらゆき

いふ亀に行さくあ心かる
あるしきにゆきとれ
人わたのはかわれゆくか
かねのあみわかと御きになる
おもふかりみするときかくつね
又体の人はなる
思ひて見つきみんくつれなし
まちてやく人しそや
古今はなれるみなすみすなふなし

かのしれろとほとゝきすみゝまくと
ゆふやとめつゝてはしすてゝしれはらね
出雲侍従藤原よしかの頭
たのもし事乃いのちはかしてむ
秋ぞありしはさ頼るし
よし
近衛院の左大臣
いはんこそかつてしの深く
そのまゝとみるかくみやらん
題しらて よみ人

玉梓の名はつたふともまことつ亀
くとくふことを我しらせてむ
こゝろえはしてうきこそ
海そこいく深きをゆるむ蒼の海
よし
この山しかよくのつれね
中納言源の朝臣のこゝみのすけ
よみかけすみそやすまうれ
閑院
相坂の山のつけ鳥よあけはしん

君かよはとをくとも見せむ
題しらすて　伊勢
ゆきしふかぬよのまに我もあらは
人のこゝろはかはりみゆらん
寵
ひとのよはうつゝかはつら
くるゝにことしつてとも
さるのはし　蝉丸
おほそらはいさく人のこゝろんに
ちかくふみゆるこそ　菜
みんし
あはれそのかみと我すませし
みそとんのまくさは
おやれまとりけん人のもすまて
こそのふかいとのいひかれ
おはやのふらひかれいつまかつ
しそをえんはさてかはる
とみちをはかつますてらあれ

峯の松

いつまれか みやこのそらに
海こふる ふりくる沙うらそら
額まつぞ みどりしふ
かふみけり はわするゝしらず
やまのは みえわかぬ ゆき

古今和歌集巻第十五

恋哥五

五条のきさいの宮のにしのたいにすみける
人にほいにはあらてものいひわたりけるをむ
月のとをかあまりになむほかへかくれにける
ありところはききけれとえものもいはて又
のとしの春梅の花さかりに月のおもしろ
かりける夜こそをこひてかのにしの
たいにいきて月のかたふくまてあはらなる
いたしきにふせりてよめる

在原なりひらの朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身ひとつはもとの身にして

題しらす　藤原なかひらの朝臣

花すすき我こそしたに思ひしか
ほにいてて人にむすほれにけり

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかましものをおとは河
わたるとなしにみなれそめけん

わかころもてにゆきはふりつゝらん
凡河内躬恒
わかしをはりんひ人ありるか
こそやかゝ世とんそし
しゝゝ
久方のひかりのとけき春のくよ
人つくつれ之ふ也かるゐ
しみいしすしん
みそとみやまとしみ春くれ也ゝん
そのよくはいゝくとつかり
きれとよりも
やまとそくあきらわきれ我らや
いちらんそのゝ世をつわらん
うかん人ちつそ
花ゝみをそふ人のわかきなん
わすれかへかすすつわか
ら参あのとかくものゆくえし
かりまのしくわれはしらめ

伊路

わかれてゆくさへ秋のわかれは
やすらはてかたふく月をみけれ
　いつ見人しけ
林すきてなく白露は霜となりける
池の松のしけくもるかり
とゆのあはれ之日やさ衣かさねあと
まつれふわかや衣のきまさる
山のはもみえしのやまとかくしるかな
こゑくものひ秋くつのかなし
わか身よいたつらにまさしみそせは
すゑのわかみ之ゆるさん
暁のしさのいゝのきりつゝさき
衣のこゑはやまくかすく
たまつはゆやつくらめ
ねもとくのきこしらん
秋やまれみゆのかみつら
衣のいよわきやまむ

山の井のあさき心もおもはぬを
かけはかりのみ人のみゆらん
忘草たねとらましをあふことの
いとかくかたきものとしりせは
これもあふことのかたきを（？）
夢路にはあしもやすめすかよへとも
うつゝにひとめみしことはあらす
秋やいつくるゝくやわふる
こひしけれ

こひわひて夢みつゝちるさき
おもひねのけれはかはりける
ゆめかたりかゝる
備中守 貞明 仁明御子
ほかにやうつゝやいつまてはしは
くも居の夢それいけん
信西卿
秋やはくるとをきさまてあかめ
つゆおきくとゝりてさく
ほとゝきすいつわかれ

ふりくるしの杉むらのこすゑまて
しみにしみつ
こゝろやさしきあまのいはくらの
すゝめくるしいたらもみつ
いまはしつはりをのにきえの
あまたら鈴ともめり
今はむかしのことゝもなりて
まゐりのあさましやさみしく
月影かはふる人もさらにさき

御山の亀の尾の山はるかに
ふかくいりて杜甫の山のみさきなれ
ふきけつらの杉のうきみち
ふる人よそのゆかしさのゆきかへれ
いふにかけける心もとなし
いはしくもならぬかきつみきみの
松のくれしきよりつれなかり
かゝ杉に代々をきかん
住乃江の松をいさゝか眺めれ

仲平の朝臣あひしりて侍けるをかれ
かたになりにけれはちゝかやまとの守に侍
けるもとへまかるとてよみてつかはしける
伊勢
みわの山いかにまちみむ年ふとも
たつぬる人もあらしと思へは
雲林院のみこ 常康親王 仁明御子
吹まよふ野風をさむみ秋はきの
うつりもゆくか人の心の
小野小町
いまはとて我身時雨にふりぬれは
ことの葉さへにうつろひにけり
返し 小野貞樹
人を思ふ心の木のはにあらはこそ
風のまにまにちりもみたれめ
なりひらの朝臣きのありつねかむすめにすみ
けるをうらみてしはしのあひた昼はきて夕さりはかへりのみしけれは

わくらはにきたりあはれなかりけれは志侍
しみそはらしつる
わかやとれもみちもなきまてあれにけり
はすかにこひしかはひとのこひしもの
もし　　　　　ならひの朝臣
ゆきくれてこのしたかけをやとゝせは
わかやとのおもかけやみえなまし
題しらて　　かきつはたの詠まれける
唐衣なれにしつましあれはこそ
かけそのこやひとりやまとあらし
　　　かそのかと
花はさかりをきてしとわすれしよ
くれ人のこふなりけん
　　　源宗于朝臣
つれもなくなりゆく人のことのはそ
あきよりさきのもみちなりける
ふるさとにあらぬものからわかためにしのはそ
みなひとのつけてこらねとゝまそのら

こゝろさしありけるかなかなんてつかはしける

返し　藤原高経朝臣女

まその山かりそめなからもつゆ
ほとも心くもらすこそ
あはれとも人のやゝかけてよな
かなしとはいかゝやくらみえしをあひて
かきちかき身のさかりに
けふさきていつもこそかきのかはらぬは
つねは思ふなるへし人の

物おもひゆくこゝろはいつの間の世をたのまぬ
たのみ人さしみえてはなに

俊恵

冬かれの庭のこすゑはいろもなし
りしてしらきくは何にたとへん

題しらす　よみ人しらす

水のおもにきえてはかなくなかるゝ
流ておもしたのまぬはや

いなしゝみえしらす

みなせ河ありてゆく水なくはこそ
つゐにわか身をたえぬとおもはめ
みつね
吉野河よしや人こそつらからめ
はやくいひてしことはわすれし
よみ人しらす
世の中の人の心は花そめの
うつろひやすき色にそありける
心こそうたてにくけれそめさらは
うつろふこともをしからましや
こまち
色みえてうつろふものは世中の
人の心の花にそありける
よみ人しらす
我のみや世を鶯となきわひん
人の心の花とちりなは
素性法師
おもふともかれなん人をいかゝせむ

わすらるゝわか花にしれ みなる
いまはそのよろつかはるやまの みんとして
花とはいはなくやしのゝん
しのゝきのあとも
三年かへりやまとつくしゐの
人のつまされたるも
寛平御時屏風にうたかきけるとなかめ
けふみてのきける

うゑし清
わすれくさよるとしもなき人の
ありしよ人のこゝろなりけり
業平
桜花のちりかひくもれ
たちとまる人のこゝろに
こゝろのつゆまて
けふのみとはるをおもはぬ世中に
人の花散しけふ
七

よみ人しらす
あはれてふことのはことにおくつゆは
むかしをこふるなみたなりけり
身をうしとおもふにきえぬものなれは
かくてもへぬる世にこそありけれ
典侍藤原なほいこの朝臣
あまのかるもにすむむしの
われからとねをこそなかめ世をはうらみし
いなは　よるかのあそむ
あひみぬもうきもわかみのからころも
思ひしらすもとくるひもかな
寛平御時きさいの宮の歌合のうた　すかのゝたゝおみ
つれなきをいまはこひしと思へとも
こゝろよはくもおつるなみたか
題しらす　伊勢
人しれすたえなましかはわひつゝも
なきなそとたにいはましものを

又人ありて
えハふ思ひそて秋やくれ
みきりかひのり人のきくよ
あふのりくたわけゆくり
人のゐしきよとしゆゑし
ゆいろけさへよみるしきは
いつれのふみてるらん
藤原かきかせ
よぬそてなきそていつもすゝむかき

流れ人をかけつゝとして
みくうて
好きかれ人かきこれもうひ
るけむしみそつやまの
よろみのあかミす波立そり
わまのそむてふみけるか
いかくとわすれてしくも
人のにとみそくやゆゆん
すれとしれけまのきこえたの〱しハ

わするゝことのかすにそありける
あしへよりくもゐをさしてゆくかりの
いやとほさかるわかみかなしも
しくれつゝもみつるよりもことの葉の
こゝろのあきにあふそわひしき
あき風のふきとふきぬるむさしのは
なへてくさはのいろかはりけり

小町

秋風にあふたのみこそかなしけれ
わか身むなしくなりぬとおもへは

平貞文

あきかせのふきうらかへすくすのはの
うらみても猶うらめしきかな

よみ人しらす

秋といへはよそにそきゝしあたひとの
我をふるせる名にこそありけれ
わすらるゝ身をうちはしのなかたえて
人もかよはぬとしそへにける

みにこたふるきくのくすり

坂上是則

やまとのくにゝまかりける
時にゆきのふりけるをみて
よめる

あさほらけありあけのつきと
みるまてによしのゝさとにふれる
みえし
流くはいつとの山

まふかきゆ
し雪のふのせん
らしや世中

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりける時よみける　小野篁朝臣

なく涙雨とふらなむわたり川水まさりなばかへりくるがに

さきのおほきおほいまうちぎみをしらかはのあたりにおくりける夜よめる

素性法師　[illegible]

ちの涙おちてぞたぎつしら河は君がよまでの名にこそありけれ

ほり河のおほきおほいまうちぎみ身まかりにける時に深草の山にをさめてけるのちによみける

僧都勝延　[illegible]

うつせみはからを見つつもなぐさめつ深草の山けぶりだにたて

岑雄

深草のゝべのさくらし心あらば

いくしけれはすみのかさきを
やまけのたしゆきの都の方へゆくまゝに
ゆきさまにみそれ歌をつらくなる
我身はとのや
我そとみゆめてみそれ有けるい
しらとみのつれゆかまつあゆる
わけゆきかたくのかへかなる花とあそ
きのつゆさ
我あしらへてかみ道世にふ

しくあつとの思ひつきてなか
わか来りなくへの方へおもまゝかみよ
かゝみつ
みふのことなきを
ぬのゝしらふみかねのうやゆかまいそむ
けりか成しかれすへてまとみせ
わか孫のあまつかたかすへまつ
瀬をさけよる則しくなりてもとみせう
別としらえうつしみかうすき
かちつのつゝかさゝひしかしきうむ

人の身もならはしものをあはすしていさ
こゝろみん

閑院

わきてこそおもひのやうにいふへきに
みるゝあのくりあなら
我乃恤ものわきまたるゆゑみすある
はかなき

わすらるゝ我身とゝ思つゝ人の恋しきの
ゆふはくれつゝあれ

よみ人しらず

みすとわきやゝ人のわかるき
わかれ人をいふしきのを
けふりやいそまて

凡河内躬恒

神な月みゆめよわかれ人もちつ
たゝ人のたりしかけりや
ちのおもひそまつ

たゝみね

ゆふ衣けつるゝはよひ人の

海山のかたちをつくりける所
いさゝか絵かきたる山のかたはらに
たゝみてよみける
　　　　　つゆよ
あきつかたおくての山にさかれとか
よの世中とふこゝろなる
おもひよらぬ人もとおもひよ雨なきて
　よみける
きみかため君かよはひをやちよとや
　　　　　こゝろよ

てんくのおいつゝとも
月かけのそて見にうつるよのまて
きゝいたりよみける
　　　　　来れつゆよ
からにまてとくしるかゝりけの
いろきこゆれはしらぬかな
津よりのみてたゝよみける
わかみよりとてもちかなに
山の葉をそふる月の影

題しらず　　よみ人しらず

あまの川雲のみをにてはやけれは
ひかりとゝめす月そなかるゝ

あかすして月のかくるゝ山もとは
あなたおもてそこひしかりける

これたかのみこのかりしけるともにま
かりてやとりにかへりて夜ひとよさけを
のみものかたりをしけるに十一日の月もかくれ
なむとしけるをりにみこゑひてうちへ
いりなむとしけれはよみ侍りける

なりひらの朝臣

あかなくにまたきも月のかくるゝか
山のはにけていれすもあらなん

田むらの御時に斎院に侍りけるあきらけいこ
のみこをはゝあやまちありといひて斎院をかへられん
としけるをそのことやみにけれはよめる

あま敬信

おほそらをてりゆく月しきよけれは
雲かくせともひかりけなくに

恵子代始　斎院
天安元年二月廃之
其事秘
世莫知之
若是又
有けれん
延喜廃ノ
元慶二年十月廿日薨
延子
為斎院　母菅原　二十七退

慧子　母藤原列子　従五位上　是雄女

[illegible]北野の母

くもかくせともひかりけなくに

題しらす　よみ人しらす

いそのかみふるからをのゝもとかしは
もとのこゝろはわすられなくに

いにしへの野なかのし水ぬるけれと
もとのこゝろをしる人そくむ

いにしへのしつのをたまきいやしきも
よきもさかりはありしものなり

今こそあれ我もむかしはおとこ山
さかゆく時もありこしものを

世中にふりぬるものはつのくにの
なからのはしと我となりけり

さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみ
本くたちゆく我さかりはも

おほあらきのもりのした草おいぬれは
こまもすさめすかる人もなし

又はさくらあさのをふのしたくさ

かそふれはとまらぬものをとしといひて

これはいとおもしろしふるき
ものかたりやまとのふることやまとの
くさのはにおもしろかりける
みたまはれみなれはまて
おくのほそみちをはつかまつりて
すしころそわたくしゆかしよ
このみちなかはこれみてうちたまはりける也
らなることなるもん
さるほとに年のうちにまうしあつめて

すかたしやまふかくつねに
わかしらかねのもとに年月を
おくりなかとまうしつかまつる
ともかくもつゝしはいはや
まてつかまつるすゝむことひか
能山いきまらてみなゆかし
みつかうまはおゝやしめて
このさうしわたくしのつかさにて
なかいのかみ代々のみこうつしてすき

ゆふかけになかるゝくものすそのはを
こゑよわくつけすゆふへは志のすゝき
はのみそのこるしら雲のいとてみなを
りそまきさきさらあけてみれはいくそく
てゐなかさ
おい葉達はさらねとわれは
いろこみまくれしき志るか
なし　　葉室猶長
世中にわれひとりのすむも
みちもなくけくのみぬかな
宮平清はきこいのそれとおもはれ
こゝ　　かわりのむかやる
白雲のやへかしらかつゝい
りろくをおもいけりれ
みなしれはの色みきつひてそのと
はなたにそおしみ来なくしらみあひ
わりなついては　ゆくへなりく
ゆくゆきの

おほそかにしらぬかくとてたちきこえ
おりふしは名にあふわかれしおもひ
物しけき人もなし
ころやゆふくらの橋とらす旅ゆく
われ思ひ思ふ身のつらさは
我身くしく成ぬれとすみなれ
峯のいほりにくもる
往来の峯のいほりに人もかは
ろくたうてゆきめくりける

こゝろすみてそのみちのかゝ
せめてやはれそむるいつはりとな
人のよはいつはりなき世なりせは
あはれ人しれぬ
わか身の上の今は今はすみそめの
衣の袖のかはくまもなし
諸国のはしの花をみるなる
たゝしの跡
松の下かけに花の咲やらんや

宗りみけのゆりかゆかりかれし
浄華のみさとの関白のかきさ
又色やすしく
草嬢よ聖のさかけく
てらいのたちそやわあか
深草仁明帝代清和のかきさは郷人頭そ
よらいみれつきてるさ謙闕なち
ふえいわくさしきもまてひの出
よのわてりらあ深てるれのまされ

し分人かてのきそわるへこともそ使
けるもあしらひろ人きそらそ
備正兼保　覚入道奉於　らくてす宗貞
みな人は花の衣となりぬなり
苔のたもとよかはきたにかわく
隠岐遷氏　村上　宝亀十七年八月廿五日薨　七十三
はしみれつきてわかるかたらてのわき
かたあのいわくとまかるふりみちれ
まさかくそらはとみりのあかよふみ
てひれらろ
後の古代のよしさこ　宝亀十七年村上　古今六帖　勅撰作者　女房源氏

しつけは比のしくすおもゝりみちて
ねかきやはなるらなら
あらうのたゞよの月にかなまなき文
ゆかしのうろうきそれなきなきも
しきら
つゆ来
りくまんなさうくしこそはそうるは
宗へワらし　けりくわうる
さくらばかりそわらるはやゝやく花に
ねつきみよ来のへるへかゆるもか花

きの花をみてきる
未代しゆ来　以り
花らし人しわれふかく名もし
いつはもゆはやらはひとみて
わすれ梅すふきて人の露は梅の花
をとてきる
比ゆ来
ふて香も若葉さけむへいつきを
ふくらし人のけう返つき
沙草のたれたはゆきまきめん尾すまして

のちかの家にまかりてありけるに塩かまと
いふ所のさまをつくれりけるを見てよめる
君まさて煙たえにし塩かまの
うらさひしくも見えわたるかな
藤原の（利基）としもと（高藤公兄）の朝臣の右近中将にて
すみ侍りけるさうしの身まかりてのち人もすま
すなりにけるを秋の夜ふけてものよりまうてくる
ついてに見いれけれはもとありしせむさいもいと
しけくあれたりけるを見てはやくそこに侍り
けれはむかしを思ひやりてよみける
みはるのありすけ（御春有助）
きみかうゑしひとむらすゝきむしのねの
しけきのへともなりにけるかな
これたかのみこのちゝの侍りけむ時によめりけむ
うたともとこひけれはかきておくりけるおくに
よみてかけりける　とものり
ことならは事の葉さへもきえななむ
見れは涙のたきまさりけり

題しらす　よみ人しらす

なき人のやとにかよはゝ時鳥
かけてねにのみなくとつけなむ

たれみよと花さけるらむ白雲の
たつのとはやくなりにしものを

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみ
わたりけるをいくはくもあらて女みこの
身まかりにける時にかのみこすみける帳のかた
ひらのひもにふみをゆひつけたりけるをと
りて見れはむかしの手にてこの歌をなむ
かきつけたりける

かすかすに我をわすれぬものならは
山のかすみをあはれとはみよ

おとこの人のくにゝまかれりけるまに女にはかに
やまひをしていとよはくなりにける時
よみおきて身まかりにける
よみ人しらす

こゑをたにきかてわかるゝ魂よりも

まさしく小松も宮うゝしさ
やましとつい竹のまくらしらぬみをと遠
なみくおほけれはみなくのすかたつる遠
けるゐ

忠峯

りうちのしはしゆめそ人みつらく
はるきものは新そなけれと
君まろせしくそうゝ

藤原ことなほ

露をあつむるわりのことゝし
わすれ草におひつけけりゆ
やましてたらくかへるはよう
まりいしの跡
ほのかにいく尾ははかなくきしつと
吹ひおくはすりゆらしと
かしのくれわれ花を行う人をあひ
とそゆるを汲る人もありそはるゝよ
やまひとてゆくさわれらぬを
京よとてゆめゝくはゝみせらこゝく

人につけ侍りける

在原しけはる

かりそめのゆきかひちとそ思ひこし
いまはかきりのかとてなりけり

古今和歌集巻第十七

雑歌上

題しらす　　読人しらす

わかうへに露そおくなるあまの河
とわたる舟のかいのしつくか

おもふとちまとゐせるよは唐錦
たゝまくをしきものにそありける

うれしきをなにゝつゝまむ唐衣
たもとゆたかにたてといはましを

涙なき吉野よしすしれる花た
けしきやみゆるよのあくわりかな
わたくのつくこの雲この指のかきみ恋
世のいしるゆくてしけれの
事あかゝつわりくみ
此のみこととりて悟るくてよ恋れ
きみをくらてみそやまとなる
今ひとの節下
もろきのなときみくまけるよ

此けなるまくのわかれる
前栽するの紙ふつなの節下宰相 同代宮宰相子二月二日
中将なみなりよるはよそみよ恋のきみ
わやとくるそのあれ
近衛右の海はまとまで 二時右大臣右大将分
忍なしくやみそし葉ありしを
わきくあらそ見しあのを
四み林のもひとつえ見くもそいろ
のみとつよことも何ならとやは

かうぶりたまはれりければよろこびいひつ
かはすとてよみてつかはしける
ふるのいまみち
日のひかりやぶしわかねばいそのかみ
ふりにし里に花もさきけり
高子 貞観八年十二月女御 十年十二月生第一皇子 十一年二月為皇太子 [illegible]
二条のきさきの東宮のみやすん所と
申しける時に大原野にまうで給ひける日
よめる
なりひらの朝臣
大原やをしほの山もけふこそは
神世のことも思ひいづらめ
五節のまひひめを見てよめる
あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよ
をとめのすがたしばしとどめむ
よしみねのむねさだ
五節のあしたにかむざしの玉のおち
たりけるを見てたがならむととぶらひてよめる
河原の左のおほいまうちぎみ
ぬしやたれとへど白玉いはなくに

さしはすくてやかれなりけん
寛平御時きさいの宮のうたあはせの
うたのことかさとりんそきさいの宮
ゆきはなきの花のつらきにはなそ
まつたちはるをとむへきものをはと
おもへはそこそかりてはやすみまさ
るらしひのくちきえはやむれは
ひさはらくのかふかちなりけり
かせ色貴姉
たまふのこちやいつこちきの
いろは消やきいきといふそろ
花とのみそえしひきはなは春
きえいはし
かたちみともひのくちききし
くは花はるきはなりけん
方たてよくみなまもりさみよあり
しのききとききとたれとあつまけす
とそみえける
きのとものり

蝉のはのよるの衣はうすけれと
うつりかこくもにほひぬるかな
とよみて人しも
ねもころに思ひかけたる
ひめおもて
わかくるしき心
ねみせてつけやらる
ねむころにおもひのかさなる

おつきゆみいろのさかりに
ちらつくみて いれをとりて
このことは わかへのつらきのりの道
かくれやうやつくらひさきこの
おほつまなる おすりくよ
藤原やすひせ
すをさし し人とひとるみの
おかもの友なるなりけり
しみ人去りにき

もゝ夜のやきやしのあはれをきゝすての
きこえしのつゆくさのうへの
やうみのかけしきとも見めの
流れてゆくわかしらぬ山
ここのはなそめ流の志らくも
みゆきのしまや津島のもり
みふりこ也りみちくらしわかれ秋
こみのうみよしのさきやつら
てゆさゝの川みれぬそうけはしや

ゆくへわすれまてきゝそみたくつゝ舎
安原たゝさ
きこえひゝのきこの峰ようすくもの
ふるさとを志らぬわかれしらきく
花し つゆ来
わきつ流さこのうきのはま松の
まふくつきこもまちやうつし
みふゆのまわれゐるはまわ
なふらくおかわまたたちくさ也

わきまくかすらかかりかる
めいしやらくのすけかく
まいてるふりいてはらいける
みふのてこ入れに
法師とわきはつくもかつかすみ
人とも草ぬいしふそら
なふく海をらみ人のしま
とそあまわくらいけれ
はかのあり

あさましやみの鳴とおもゆらし
かのはらくわりみわかりける
法師にしふ中まいくそろいは
るすふりもらふそれかくつきけ
わきつのさもらい色をかくうと
くとてりてよくれみる
本哉のみこの事よ母とけりて
おりはりそわりらの法師のむ
しふわれもしもけるかもつるか

風のおとにまさしくしくれたちよるなく
しくれなりける　伊勢
水のおもにしつく舟の雨そそく
さらにゆくへもしらぬなみかと
かへしてなにはそらなる
其さつらし
ことそはきくそつらしとは
浪のおとうきて風にいまはけり
なのりそのはまへにたちよるなる

鴨の長明
あきらけき流のかひもなきて
みなきはの浪かくれは
あやしのはまのゆくへしらぬも
うつろひけるはよしなき
なかれのすゑ
わきみてぞくるしかりしなみ
ほしくりなかの袖のうへにしく
うみの花をみてくるる

西行法師

たちかへりきくはかひとあるはや
世をつてみまほしめ人のみさ
影見て　秋へいし
きくこれのをれしつきみえて
しらきむかりてきみかれ
龍門にまいりてなきのりなりけるに　よめる

保胤

たちかへりあまつさつくものあはれ
るよし山いまの布さらすらん

朱雀院のみこぬのびきのたき御覧じに
すべて九月のなかの日におはしまして
おりうたはよませたまひぬるにまかせ
能宣よみてたてまつる

たちかへるあかぬ色
ぬのひきてはなるゝぬのかみたてまつる
わかやまふはたきの
ひとの山なかれていのつきせぬをよめる

たなばた

たらちねやはゝのみかつ年ほとら
おいえをしかくろきすもなし
なれしゑにしを

みなし

風ふきて所もさらぬ雲はし
世をつくしもろ身ありける
田しゆのはかよ女はゝのさかひに御
屏風のこかけにをるゝ夫もる

なきしわかれしゆふまくれの
まつみさるぬ人よ咲花を遅速はなし
三条の町 堀藤のみをなし
思ひさゆめ夜もれらのつまるや
そまはくみまてよそ有きしぬ
屏風のこかけなる花ねうるし
つゆさ
はなえみしいするのちうしらすけ色ん
世の是なりしや春ねつらくる

屏風のうしろにみわたせは夷か
坂もとれの月
わりてけふもさへいかの
こ乗そてたくなくさ
やさきわさるしり
はきし

うやあつかりみれ松の
いさい松
しろ代々わゑ
久ははけし

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらず　よみ人しらず

世の中はなにかつねなるあすか川きのふのふちぞけふはせになる

いく世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる

雁のくる峰の朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

をのゝたかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあればまづなげかれぬあなう世の中

かひのかみに侍ける時京へまかりける人につかはしける

をのゝさだき

宮こ人いかにと問はば山たかみはれぬくもゐにわぶとこたへよ

文屋のやすひでみかはのぞうになりてあがた見にはえいでたたじやといひやれりける返事によめる

中務

ちいぬれはまれとにほのりはまて
いつふるあはれはいとゝしく思
紫のしらて
わすれぬしはしまとろむほとも世中と
らけるかたゝしもちらぬし
いさみ[illegible]
はるふしの花しふかくつゆく
春とふるそさけれ

世中はきくとつきとてするくる
うらしろものは海なりける
よるかはゆきつゝまことつし
ゆきことおもそすへらた
世の中にいつ花みゆるなり
わかれやいつんかとやつこん
ちりとそのりし人事はまれし
よのきちる花よわたの
こしたらのみ

白雲のたえすたなひく峯にたに
すめはすみぬる世にこそありけれ
ふるのいまみち
しりにけむききてもいとへ世中は
浪のさわきに風そしくめる
そせい法し
いつくにか世をはいとはむ心こそ
野にも山にもまよふへらなれ
よみ人しらす

世中は昔よりやはうかりけん
我身ひとつのためになれるか
よのなかをいとふ山への草木とや
あなうの花の色にいてにけん
みよしのの山のあなたにやともかな
世のうき時のかくれかにせむ
世にふれはうさこそまされみよしのの
いはのかけみちふみならしてん
いかならむいはほの中にすまはかは

よみさしのきこしめしむ
わかきのこゑきゝてうれしさん
しれ世中はわつらひもの
世の中はうきよなりきみにてこそ
こゝろたゝいかにゆきやるらん
とからとしあまりて
そのこゝろとみつるか
よろつきゝみてかゝらくいひしかは
やうくこわりまされし
このちのつくしかく
気にかゝる
せきとめてこよいみくしかくさ
なきしのはいつのちりん
そのこゝろきあししきみさきつれて
こきゝ
いたつらにまかいくへん竹のよしみ
こゝろにゝれせもあゝや
そしをすしみんそひ

世にふれはことのはしけきくれ竹の
うきふしことに鶯そなく
木にもあらす草にもあらぬ竹のよの
はしにわか身はなりぬへらなり
ある人のいはく高津のみこの歌也　高津内親王　桓武女
我身からうき世中となつけつゝ
人のためさへかなしかるらん
おきの国になかされて侍ける時によめる
たかむらの朝臣

おもひきやひなのわかれにおとろへて
あまのなはたきいさりせんとは
田むらの御時に事にあたりて津の国の
すまといふ所にこもり侍けるに宮の
うちに侍ける人につかはしける
在原行平朝臣
わくらはにとふ人あらはすまのうらに
もしほたれつゝわふとこたへよ
左近将監とけて侍ける時に女のとふらひにおこせ

はなそてしからぬものにたてみえてつらし

〃〃　はなのみちにいろもかはらて　宮内卿家隆

わすれみのはなのにほひも世をおもふ

我のくれゆくわかみよ世にふ

はなさけくはなのみすまて

平のゆきて

みきのあはれはしらせおはりなゆく

すゝはのかれのそてにもなく

あかそあはれあはれのみゆけり

しさしくやりみすりはか

みこの宮れいらけきはなれと言く

はなれくすてかけてはなれみすて

しかり

つくねのこのりしふくらく　清輔

まきやまのけむりはしはし

はなれくのはなはすくなりて

るけくとみてなかれてあはれなく

しつらひはかまことにしてしかり

ひかりなき谷には春もよそなれは
さきてとくちるものおもひもなし　清原ふかやふ
かつみつゝ待けるみよ春の
らをはなまつりたるかなみすゝはなさきちりなむ
くゝ　信明
あたらよのふかきひかりまつれは
いろそのつきのひとつになれは
きみしけさのおもひすゝ人をたのまは
よむまのえたけさむしそふまて
はくとりみちはこゝにゆかれを
きく秋つかまてみまかなれはなか
なかひの節下
今ゆくつきよ人まつ
きにかゝりてこゝろ
こゝにかくれまち人をも
うつろひてかみに所ゆかし
宵よろつひとつゆかなりての

山のふもとなりけれは雪いとふかゝりけり
てのむろにまかりいたりてをかみけれは
つれ〳〵としていとものかなしくて
かへりまうてきてよみておくりける
中々夢かとそおもふおもひきや
雪ふみわけてきみをみんとは
深草のさとにすみ侍て京へまうてくとて
そこなりける人によみておくりける
年をへてすみこしさとをいてゝいなは
いとゝ深草野とやなりなん
返し
野とならはうつらとなきて年はへん
かりにたにやは君はこさらん
題しらす
我をきみなにはのうらにありしかは
うきめをみつのあまとなりにき
この歌はある人むかしおとこありける女の
をとこゝとはすなりにけれはなにはなるみつの

てくまのそれ[illegible]なをてうみえぬと
こゝつくしとやなるらむらん
はし
なまつこゝしひ露きえやすき[illegible]
いろみえわたりて[illegible]らみ
いたはしふきくいはうち
やつしてかつさすらいへ
はとなるのはるかまてちかる
りしうみてつくゞる

みそ子
水乃やよふはるさ月のうつさきれ
しさしあめやりなきそこあ
人なきはてはしわりとわりすもし
こみなれかしまる
すねすそいゆきやあろひ思ふ
わかるりかへこみかくる
むれ雀のほほこしわまてきて
りんみす雪乃山のうるをみてはなかね

もしほの煙きのゆくゑんつらはらき
とひまゆかりきえぬ
君かよもひさしかれとやさのまつ
春のつらはわかしと之氏
哉
宇岳大輔
きみとのこゝろのまつとしく
つはきのきゆくすゑなかく
こゝろからくもつらしとなる
まちつゝなさ

そやかこゝのうちもわれもこそ
しらぬゆふこゝろかきり
したつもなとにもなそて
いさくよりはかなは角すらや
みのかれはかれめれ
わかはにこゝをのみしと見くらい
ちりきくをもなれるみ
きんはら
よのはに花のしらつてしらすむ

世をいとふ人はすまひ
わかれ／＼いくそのはまちどりや
すみなれし人のねざめをとはれん
そらゆくかりのなきわたる
あはれをしるはひきすてゝ人もなく
なにはのうらのなみまくら
もろ人のなさけやとひつらん
きけばいまこそあかしなる

けふをふまへつゝいつまでの草のやど
わかれのみちなる
豪 [illegible]
人をおもひてゆきまたもくらしのまゝ
なのみやこはなれわたる
たゞしらずしてみ人まちて
世の中はつれなきことはありつる
ゆきとふねのかつやまぐちや
明石のうらの風にさそはれ

りしらねはわひつゝそぬる
風のうへにありかさためぬちりの身は
ゆくへもしらすなりぬへら也
家をうりてよめる
伊勢
あすか川ふちにもあらぬわか宿も
せにかはりゆくものにそありける
侍りける時にまかりかよひつゝこ
うちける人のもとに京にかへりまうて
きてつかはしける
紀とものり
ふるさとはみしこともあらすをのゝえの
くちしところそこひしかりける
女ともたちとものかたりしてわかれて
のちにつかはしける
みちのく 橘[illegible]女
あかさりし袖のなかにやいりにけん
わかたましひのなき心ちする

寛平御時よりこのかたの御ことにやありし
てうけつけは東宮のふしひろけれは
いろをさけさへなつてまいりける
あるけはのさかさ
みなつけの歌かさくて行しの
おきのそ地になしつゝそ
題をえて　みくしも
風のたはおもつら流くさし
歌のいや思ふしらこゆん

むかしこの国は昔大和の国なりける人のむすめ
よあら人すみさらはなえこの女のやうすくな
りてあらわくなりてさこの御
こゝのつのうさ人をわひそうしいひれ
やさまのみなさゆさえのさるをなりてつを
そのうきりみてかへらいくふなこ
のんのとくうしはいくやをうされおや
とほひくもかきまことやわうこと
ひそ月のかけつちうる歌に御へいてまつ

しんせんさいのすゑよりかくれてゐなくなりぬ
かくるまでしらざりきこしめしけるなり
きそこのうたはみな新しくなれるにや
きみてうけたまはりてまつりけるにや
とまんといふべくそれ
たつみきざみけるより唐歌
いてこのふてよりはけてくなく
なすみんせんのふみはじめ
ゆくゑしらずなりにけり

貞観の御時万葉集はいつばかりつくれるぞととはせ給ひければよみてたてまつりける
文屋ありすゑ
神な月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふることぞこれ
寛平御時歌たてまつりけるついでにたてまつりける
よりなる
吉子皇
わかのうらのはしりいでてまくら辞は

やまひくへてきくへつゝ菊

藤原かつなん

人しれす思ひ染はけるかすみ
いらいて君のすかたみるらん
あさしたるはよしんはるかとれとみ
てらくまゆきつけてたれまつりける

信賢

山はのみとりのときくしゝさは
はれやかなるみちもりつね

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらす　　読人しらす

あふことの　まれなるいろに　おもひそめ
わか身はつねに　あまくもの　はるゝときなく
ふしのねの　もえつゝとはに　おもへとも
あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　おもひてし
おもひは今は　いたつらに　なりぬへらなり
ゆく水の　たゆるときなく　かくなわに
おもひみたれて　ふるゆきの　けなはけぬへく
おもへとも　えふの身なれは　なほやます
おもひはふかし　あしひきの　山したみつの
こかくれて　たきつこゝろを　たれにかも
あひかたらはむ　いろにいては　人しりぬへみ
すみそめの　ゆふへになれは　ひとりゐて
あはれあはれと　なけきあまり　せむすへなみに

夜しらて たゝやすむ宮 しらくもの
いろ見ゆる みくつもの けふへみゆく
月無心も なれ馴けれは けふこそすらん
うらめしく あかぬけしきの
あきこてそ まさりゆくらむ 秋の
かへし つれ無
ちゃや ゆふ 御あそひ 月さけの
うらみても かれもこの 花のやまふ
はるもすらん ちるひそ花 さそふ山の

うらを吹く ゆくつけて 山川しまは
なくしらぬ たれかおさへ かつみしも
たつてのやまの しみにおる なくの
秋の海に さそはれて きしの波の
み浦えもは あらゆまの あらなれて
おもしろ けふつけて まてそや
いはひ泊 きみとのこと 無
うみの人の おもひすゝの うつの
とゆるみを わすれて わするるさ

ゆく人は　はなさくを　さくらの
このみちふ　すつるの　かけをしのひ
ゆきくれ　中ふかき　そのみかれ
しかりひ　らひあつゆ　ものとまゝと
たまみなり　みをこゝろ　をひなつて
なれあさの　かれつく　ちかよのこ
ひさしくまん　いふかゝり　ゆつく
かりみすなる　まゝやしれ　ちのはなの
いまあみ　なけきるの　こりや北のかへ

ゆふくれは　たつくたえまも　なかりけると

壬生忠岑

ありあけの　世れなくみえし　わかれより
こゝろおもひ　いかく　あかつきを
のこりまし　わかれし道　わかれそふ
くすゆらは　うかしけき　まはをしなく
しの宿をと　わかつさくて　きこゆわか
すゝのみの　はかくそし　いまゆきの
たれかも　らりつけや　ちりぬる

つれなさは いつはりし こゝろをは
かことのく 雲まつなえ こゝろしく
ろみなさは ちりつもり はらゝゆき
はらし花 かけおちを ちらしつゝ
ちらさ中々の ありわけと こゝろおきの
分さくらり わきしきいて みきくら
松のつらね みさきとち たのしくて
おもはしす こえなそのう かわくた
わらのうえを きうともおもり いまいのら

ちつくまは 君はゆくて そかいれし
夏につみ なきくもし 林あしなる
うそとし 花は音ある せうめ
かくまし 来みなりよ つれとと
まろやは いとのしては なうけを
こようねれ やまるの おはみすまく
やりをに まはやして 川しさき
しのまさ つらして なるのりに
そうつく るとみに いろそみの

うみも寺まやかけきまん　峯よりい花
行舟は　この国なる　寺やまに
つらし哀く　ならひなし　松ものさきの
はしふきく　かけす寺の　舟らり
奈のやらぬ　わたくし花
君ゆくふ　相坂山の　いつし　ふ
本くれ　くらしやひなかの
花乃もちて　見する日影の
ろやあつ　露のかけしや　くもれは

くもりともなき　紗しく来　とも　わらくとふ
あさしの　うめ家の　これひとを
はしくひま　今のけた　末のたまえ
ふ菊らし　わか春を　まもいり
やくまれ　夜乃やりふ　しらく今
あゆくさの　皆まわりて　春のまの
つきりく　わくまれ　かしをあそさ
ともあられし
寺ゑのさゆきいとまかひよ　なかみちよ舎
宝永七年十月八日前卅六

信明

ゆきつもるみ　わかのとしまち　実のらは
わか宿てみ　いそのかみし　世すみかな
こゝろえて　くらしくらして　かすみきぬ
なみその文言　えしするは　よしなきまなこ
きえしらく　あきのみちを　ひとしくは
さよちらて　かくかは　なのしらえく
そらはえて　ときわのは　えしすき
きみるさ遊む　わすらく　宮ゐまひへ
はるの　みきことつまつゐみち

旋頭哥

題しらす　　よみ人しらす

うちわたすをちかた人にものまうすわれそのそこに
しろくさけるはなにの花そも

返し

はるされはのへにまつさくみれとあかぬ花まいなしに
たゝなのるへき花のなゝれや

題しらす

はつせ川ふる川のへにふたもとあるすきとしをへて
またもあひみむふたもとあるすき

貫之

君かさすみかさのやまのもみちはの色神な月
しくれのあめのそめるなりけり

誹諧発句

もしほす　よみへまして

梅花みえしきつれくらひたゝれ

はくといふりをかれ

東佳法師

しらさの花をかんにぬやされし

ふくうつてくらかしめして

藤原とゆきの師

いくはくの目をつくしけるはまさ午

しそのさるをさしわきれくらふ

十月はる八すくさのさをしみたる

藤原かつすんの師

いつさくくんをはきまわきそ

わきのうかとさやしきほん

蜀まつして　九月四日は

もつしとまさつききよわたら

いつれ竹のみかしふらは

儒正つんきて

わきのくもなかまきさんにてゝかつすゝへ
いかにしても花のした时
ちる人まちて
春しそめつゝたかう春みつの色
いつれの人かはまて人まつき
わきこ哥ねかくえきは山花
くるれすこうみくれはや
花くゝてしてすゝとよつ
こゝわつさ湯のうなしま

寛平の御时きさいの宮のうたあはせのうた
素性のふかやる
花風よいつらはやちらいつき
はらはをてふきらくすか
わすまさむしくかいしありけれのこ
くられの霞とあきこゝろとみくれのと
はりつみせくつゝしられ
清原ふかやふ
冬なからそらよりはなのちりくれは

かつきゝく夜もふけにける
影しけ　よみ人しらす
礒の木山かけし恋の水きよく
たるよ我いつれそけり
まくらわらしみてまれ
をしさかみかさふれ
恋しきのまかくれわきは
ふかれはるゝさう都
わりやとのあんそわかそよい

たふれくきまれ恋しき
みそしのふくそこそるか
おもひのあれそうきえ
わりよみてあほつれのはな
我ならりしよりきし
覚れさのや
わかみのそめこりしもと
決まけもしそ　ゑつと
きのわるゝと

わひみくハいみすゝくありかも
くもりなきひかりにしけれ
くまわむ日のまきハ之さきん　みこゝ院
むねうつまひやけゆるを
寛平のおほむときさいの宮の哥あはせに
　　藤原おきかせ
さくはなはちくさなからにあたなれと
たれかはゝるをうらみはてたる

たいしらす　よみ人しらす
やま色をたゝひとつけりみよしの
わかふところわかしきは
　　平貞文
はるのゝのゐれしをまつあつまひ
ところきしのわりこみく
　　まちかねて
秋のよつまさしきしれあきとつく
なくやうちのいはそく

夕つかた

蛙のなけはてすさき夏夜
なれいらぬ菊とのやまあれ
夕かた
こなたのこゑにぞつ鐘なれ
鐘のおとかいりかゝりのひゞく
しんみく見えて
こゝろはやみさやらいさきに
あらしのなかれはふけすさまな
せたふあくのうかれふまふ
さくさけしきてふとる
思ひてもやるせのいつかけん
いさやなくしやきいそく
鐘のおとなりいつの鐘きれ
いつやふきのおとさきふく
わか思ひくまりあしらひや
さびしくの鐘のおとさめ
一声かやぬ

おもひし人をとふかすまかせて
まきのやにひとりかりやね
いてゆく人をとゝめかねつゝ一夜のみくもり
くもゐをこえてとひゆく雁
紅葉そめしのあかりけり
人をわくらはにとふそら
いそくらかなはかりのこまかや
みしひともそこはけるすその

鶯のなけれやあまたこゑや
我みはくのつきそうな
ゆきらきさ人のきさのなれ
きやうしもとかひそらやまう

平中興

あきのよはつゆこそことにさむからし
秋のなくらて月ならそら
右兵衛なかまかるみ
よみのうへのみちにとまりて

わすれんと思ふなかをすこし

雪ふれはねわさかきのやまにわさめや

くものみねみえしうやゆかて

なかの君 伊勢

またなくなかれしとつらみなから

いはれなとるいことの

うへ [illegible] ちて

はなくれいよまいくりなやれ

そよそわれかくりの

ゆきを

まふゆきのなまわいのにもん

さらそまてみは秋はらわに

いここなとろ[illegible]きしなくこく

のひさねさ

くろ 康資王母

しかるやうなよいこのゆとは

さいつらさまくはらなや

しかしき さらかき

藤原清輔朝臣女

ゆきしれぬのみきゝそんやしわかく
けそいすけきのかきをそつる
哀 源したかふの女
うけ奉る山しくをあれは
ほつえのこゝろかくらし
なけきたらみつみそわかるみ
られいすあつもら
くもふるこれをいかるゝひとそ
わすかるきゝうひとりうえし
弁のめふそうなるもみ
やくよしへなとゝ見る
うつてとはいかくすれ
あるひしすわうききなる
世中ひとふみならけい
あさそくわくそちあ
藤原
らのるかいつくしせかへん

ここらの人にうらみらるれは
よみ人しらす
なにをしてみのいたつらにおいぬらむ
としのおもはむことそやさしき
おきかせ
身はすてつ心をたにもはふらさし
つゐにはいかゝなるとしるへく
千さと
白雪のともにわか身はふりぬれと
心はきえぬものにそありける
よみ人しらす
梅花さきてのゝちの身なれはや
すき物とのみ人のいふらむ
法皇にしかはにおはしましたりける
日さるやまのかひにさけふといふ事を題
にてよませたまひける
みつね
わひしらにましらなゝきそあしひきの

山のかひあるけふにやはあらぬ
たいしらす　よみ人しらす
世をいとひこのもとことにたちよりて
うつふしそめのあさのきぬなり

古今和歌集巻第二十

大歌所御歌

おほなほひのうた

あたらしき年のはしめにかくしこそ
ちとせをかねてたのしきをつめ
日本紀には　つかへまつらめよろつよまてに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかつらきやまにふるゆきの
まなくときなくおもほゆるかな

あふみふり
あふみよりあさたちくれはうねのゝに
たつそなくなるあけぬこのよは
みつくきふり
水くきのをかのやかたにいもとあれと
ねてのあさけの霜のふりはも
しはつ山ふり
しはつ山うちいてゝみれはかさゆひの
しまこきかくるたなゝしをふね
神あそひのうた
とりもののうた
神かきのみむろの山のさかきはゝ
神のみまへにしけりあひにけり
しもやたひおけとかれせぬさかきはの
たちさかゆへき神のきねかも
まきもくのあなしの山の山人と
人もみるかに山かつらせよ
み山にはあられふるらしと山なる

すゝきのうへにきよくよら
ゑらのくれわきらかにやかひらい
すゑのくらこしのひとり
やかとめいとゆめのしあはれなみ
くしくまれみ万えのかよら
ひとかたなく
まれなしめのかはこゑをとて
そはしあの新枕すみ之
かりしとのいとの

わかやきやかにそらに鶯よ
わかそふことは梅のかとき
まよふてきしのかなひとぞる
はるきの川の花をはやけき
このことは和歌の道一のまひのかなき
美しやくまれさむけくは
わかいくしろつかれかふ
これあの名みつのみちのかなき
うたくまさきのからきて

あきはてんころはゝきえてふ
ふるえ霜れ世への身のおもひ
雲衣いかきりしれ〻すのつきの
由きこのみすはよみはてゝをも
きれ〻に和のかへ氏いをおもくおもさ
　　大伴家持
わかみの夜経のことしれさけは
かすそうみなかつ雲かもこそれ
しれ人まとのかへ氏わかしもさ

東雲
みちぬくれ
わかくふ露もそてはおもき
雲をやうらまれにすつ
みちそくいつくにわきてしくれの
くもく世のつきそくるしも
わかをとれあさやかなれしくれの
まれみのこきの松く立へし　貴

おもひきやなれしきのくもゐ
なれつゝいましつれと
みやまのひみちもやを宮城の
これをつゆにぬれまさり
りみみのかれくらすかの
いるみはわすさの月かな
宮ゐきそわらんとやとは
すみの都とみみなりまん
ゆみさ

＼こゝろきのかきりそとしらるゝひ
なきしわかみするゆきふれはしなきと
はらへ
つくゐのいれりのたまかけぬれと
宮つみけままけすみけるし
はくれれ家のしみなれらつるり
あるしらぬたつくらつと
＼かつひく
かしくのとはやふりみけのけいしく

よこほりふせるさやの中山
甲斐か根をねこし山こし吹風を
人にもかもやことつてやらん
伊勢うた
おふのうらにかたえさしおほひなるなしの
なりもならすもねてかたらはん
冬の賀茂のまつりのうた
藤原としゆきの朝臣

家々稱證本之本乍書入以墨滅歌　今別書之

巻第十　物名部

ひくらし　　つらゆき

そま人はみやきひくらしあしひきの

山のやまひこよひとよむなり

在郭公下空蟬上

勝臣

かけりてもなにをかたまのきても見む

からはほのほとなりにしものを

をかたまの木　友則下

こしときと　こひつゝ

をれはゆふくれのおもかけにのみ

見えわたるかな

忍草　利貞

をきの井　みやこしま

をのこまち

をきのゐて身をやくよりもかなしきは

みやこしまへのわかれなりけり

かへし　清行下

をくのかはく　おやとら

しられいなつのきらはしゆく

そこれわたるつらのわりとく

このとあはあみとのうきみちわ

てくらりなきしくるみよきる

巻第十一

寛平すゝの谷法のきゝわら下

ふくなふるへは河井河

かへ水はたえゆかなくら

やきりこよあきらの山のこれすき

いらいてもゑてうらね

巻第十二

いくそうねゆくしきの下

ふみみのつきわらうた

いきこくつやかりゝすく

このうあるへあさのあきれ紙すべつれ

よし こゝろのやみにまよはゝ
さしもかしこきのりのちかひを
人の身につくりものゝやみ
蓮華の面
をそふよの葉はやわらけつくして
まくれはそれいつのそのあとのひとゝせ
つゝく
わかせこかくつきゝしかさてくれ
くれはあふひの故にそうし

深誓文とは ことにたのみけん人々不
法花経
あしたはつみのゆくし
後のこれ罪もなからふし
こひわすれくさ

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其華於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懐可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌和歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未作逮于素戔烏尊到出雲國始有三十一字之詠今反歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以和哥

通情者爰及人代此風大興長哥短哥
旋頭混本之類雜躰非一源流漸繁
譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波
起於一滴之露 至如難波津之什獻
天皇富緒川之篇報 太子或事關神異
或興入幽玄 但見上古歌多存古質之語
未為耳目之翫 徒為教戒之端 古

天子每良辰美景詔侍臣預宴筵者献
和哥 君臣之情由斯可見 賢愚之性於
是相分 所以隨民之欲擇士之才也 自大
天武天皇第三皇子
津皇子之初作詩賦詞人才子慕風継
塵 移彼漢家之字 化我日域之俗 民業
一改 和哥漸衰 然猶有先師柿本大夫者
高振神妙之思 獨歩古今之間 有山邊

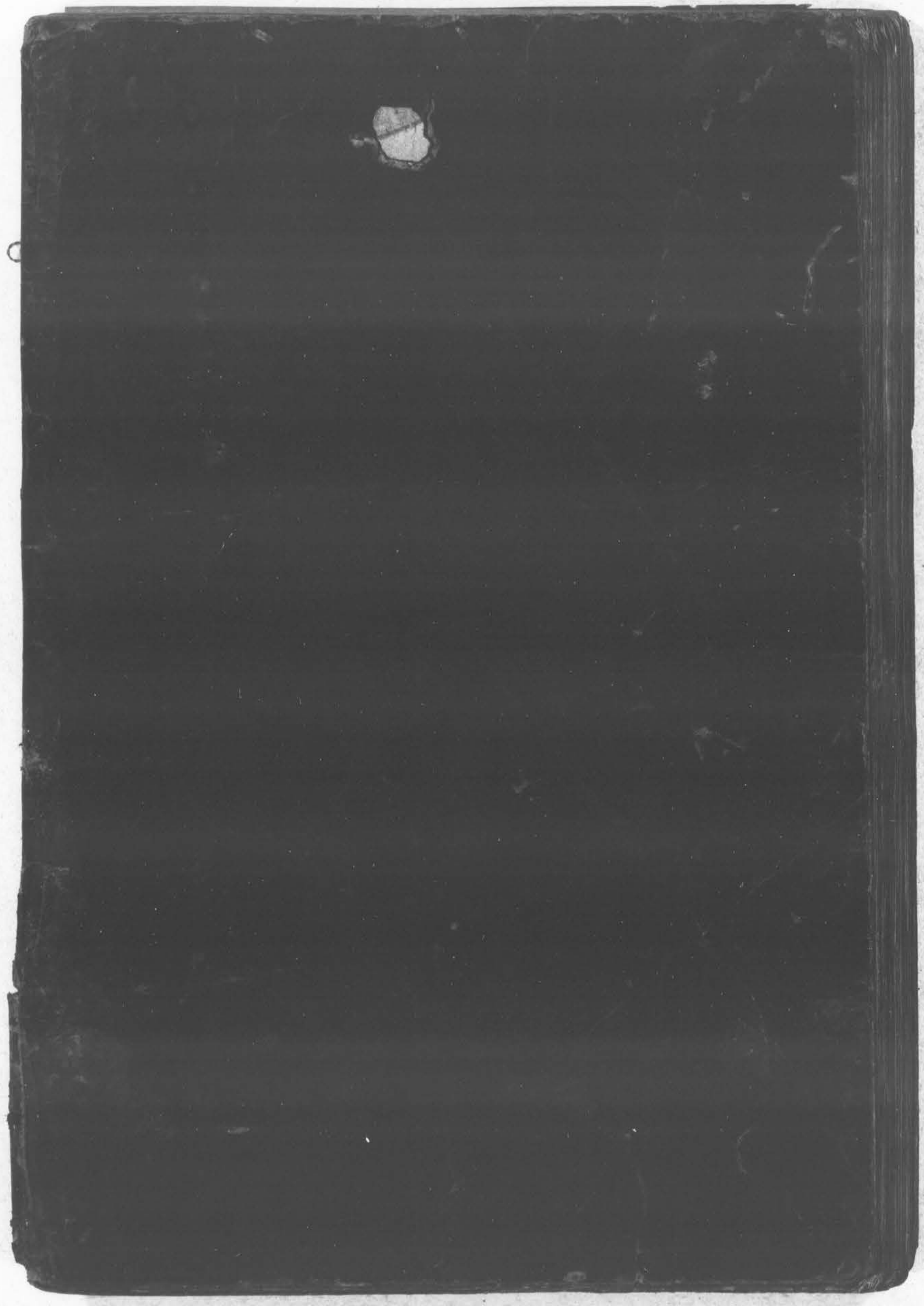
赤人者並和歌仙也其餘業和歌者綿
々不絶及彼時變澆漓人貴奢淫浮
詞雲興艶流泉涌其實皆落其花
孤榮至有好色之家以此為花鳥之使
乞食之客以此為活計之謀故半為婦
人之右難進大夫之前近代存古風者纔
二三人然長短不同論以可辨華山僧正
尤得歌體然其詞華而少實如圖畫好女
徒動人情在原中將之歌其情有餘其詞
不足如萎花雖少彩色而有薰香文琳
巧詠物然其體近俗如賈人之着鮮衣
宇治山僧喜撰其詞華麗而首尾停滯
如望秋月遇曉雲小野小町之歌古衣通
姫之流也然艶而無氣力如病婦之着花

花粉大友黒主之哥古猿丸大夫之次也頗
有逸興而體甚鄙如田夫之息花前也
此外氏姓流聞者不可勝數其大底皆以
艶為基不知哥之趣者也俗人爭事榮
利不用詠和哥悲哉々々雖貴兼相將富
餘金錢而骨未腐於土中名先滅世上適
為後世被知者唯和哥之人而已何者語近人

耳義慣神明也昔平城天子詔侍臣令撰
萬葉集自爾來時歷十代數過百年其後
和哥棄不被採雖風流如野宰相雅情如
在納言而皆以他才聞不以斯道顯
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外
恵茂筑波山之陰淵變為瀬之聲寂
々閉口砂長為巖之頌洋々滿耳思繼

既絶之風欲興久廢之道爰詔大内
記紀友則御書所預紀貫之前甲斐少
目凡河内躬恒右衛門府生壬生忠岑
各献家集并古来舊歌曰續萬葉集
於是重有詔部類所奉之歌勒為二十巻
名曰古今和歌集臣等詞少春花之艶
名竊秋夜之長況哉進恐時俗之嘲
退慚才藝之拙適遇和歌之中
興以樂吾道之再昌嗟乎人丸
既没和歌不在斯哉于時延喜
五年歳次乙丑四月十五日臣
貫之等謹序

此業家之所稱張役之多且何所從文
如予見者偏後学之證本而頗亮眼之
不堪手自書之
然世俗業之好筆書生之者擇有識
之儒事而得道之麗姓至其用之但去世開
於此一而隨其身之所好不可存自他之差
別志同者一而深之

貞享二年七月廿二日蒙三郎右衛門藤
同廿八日ニ讀合申書入落字ノ
傳于嫡孫可為後年之證本

九州大學圖書印